

バドミントンのコーチングスキルと試合分析の視点の関係

0632140 松木一生

指導教員：山崎 治 助教

1.背景

スポーツなどの競技において技術を選手に指導する場合、うまく言葉にできないことがある。また、指導者によって、同じ技術を指導するにしても伝え方や伝える言葉は違う。そのような言葉にすることが困難な知識を暗黙知と呼ぶ(時津 2007)。スポーツなどの競技では、技術を習得するために年単位の練習によって、自分の技術に関する暗黙知を獲得する。それと同様に、選手を指導するために用いる知識(コーチングスキル)も獲得しており、初心者と経験者では、その暗黙知にも違いがあると考えられる。本研究ではバドミントンを取り上げ、初心者と熟達者との違いを明らかにする。

2.目的

本研究では、映像を用いる試合分析の際、コーチングスキルが違えば試合分析時の視線も違いただろうと仮説を立てた。その仮説に基づき、眼球運動の分析を通じて、初心者と熟達者との違いを明らかにしていくことを目的とする。

3.実験

3.1 目的

バドミントンの試合映像を見てもらい、コーチングスキルが違えば試合分析時の視線にも違いが出るのか調べる。

3.2 方法

実験参加者：千葉工業大学バドミントン部

4年生5名 1年生5名

機材：NAC 社製 EMR-AT VOXER

材料：千葉工業大学バドミントン部の試合練習の映像を編集し、10分程度の映像を用いた。映像はコートを手前側から、縦方向に撮影したものを用いた。

手続き：各参加者には椅子に座り、装置の設定を行った後に試合映像を2回見てもらった。見る前に、手前のコートのペアを指導する立場として試合映像を見るよう指示した。1回目は参加者に発話させずに試合映像を見てもらい眼球運動を測定した。2回目は同じ映像を見ながら発話してもらいそれを記録した。

3.3 結果

分析ソフトはEMR-dFactoryを使用した。注視回数、視点移動のパターン、連続注視時間、発話内容と視点の関連性について、シャトル中心タイプ、前中心タイプ(手前コート中心に注視)、奥中心タイプ(奥のコート中心に注視)の3つの注視タイプに分けて分析した。図1

に各注視タイプから代表的な1名の参加者のデータを取り上げ、それぞれの注視タイプでの注視項目ごとの注視回数の割合を示す。

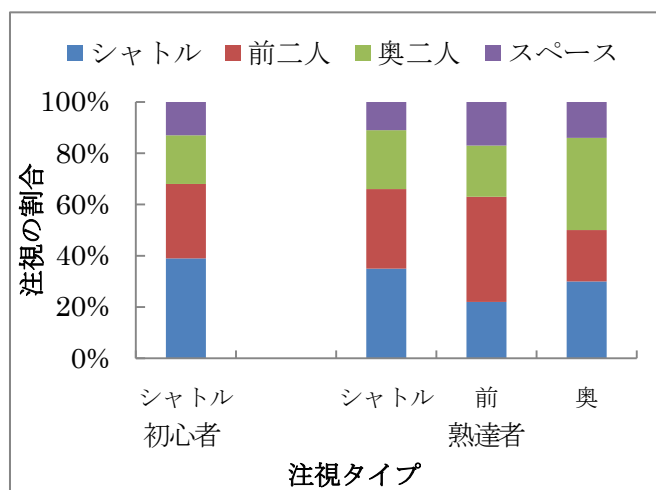


図1 注視項目の割合

さらに発話内容を技術、ポジショニング、感想の3つのカテゴリに分類した。技術の割合は、初心者、熟達者のどちらも高くなった。このことは、シャトルの動きやラケットワークが最も目に入りやすく、発言しやすいのではないかと考えられる。また、感想の割合が熟達者よりも初心者の方が高くなった。このことは、初心者には指導するための知識が不足しており、技術やポジショニングについての発言よりも抽象的な感想ばかり発言してしまうことが考えられる。

実験結果から、初心者は単純にシャトルを追いかけていることが多く、熟達者のシャトル中心タイプはシャトルの動きを見ながらも指導のポイントを他の注視項目で探していることがわかる。前中心タイプは、足りない技術やコート内の移動のポイントをチェックしている。奥中心タイプは、相手の癖やパターンを見て、それに対しての対処法をチェックしている。

4.まとめ

眼球運動の分析の結果、コーチングスキルが違えば試合分析時の視線も違うことが示された。熟達者は今まで教わっていく過程でそれぞれの観点(試合の見るべきポイント)を学び、自分の観点としていた。

参考文献

時津裕子(2007)。「鑑識眼の科学」青木書店